

- 国語科の授業のアイデアを広げたい!
- 具体的な実践事例を知りたい!
- 授業の導入に使える小話はないだろうか?

そんな先生方のために、秀学社国語科通信では、国語科の先生方に参考にしていただける情報をお届けしています。

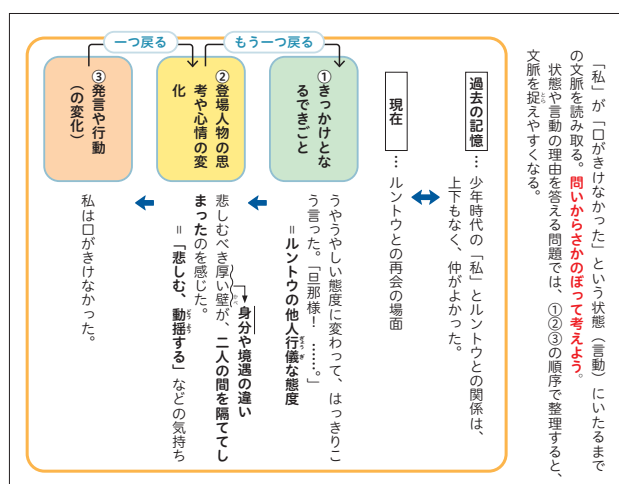
「故郷」主人公以外の登場人物を中心に据え、リライトしよう

札幌市立啓明中学校

山上 史織

「故郷」(魯迅)は、百年ほど前の中国の作品である。中学校三年生には内容を理解するのが難しい部分が多々ある。歴史や時代背景、当時の状況などの説明を入れつつ、生徒が自分たちで想像して作品を理解するためにはどうしたらよいか。そのひとつの答えとして、今年度の「故郷」ではリライトを中心に、作品を読み解く授業構成を実践した。

秀学社「新しい国語のワーク三年(以下ワーク)七十二ページの「解くときのポイント」を参考にし、「私」以外の登場人物の心情を読み解き、その心情を入れて小説のいち部分を再構成する。



▲ワーク3年p.72「解くときのポイント」

この単元を貫く課題は「主人公以外の登場人物を中心に据え、作品をリライトしよう」である。生徒は、リライトをするのは初めてだが、中学校三年間の集大成として今まで学習してきた知識や技能を活用して取り組む課題を設定した。

リライトするためには、場面描写の読み込みや、主人公・その他の人物の心情を丁寧に追って読まなければならない。自分では理解できない場面も、ワークの「解くときのポイント」や「ふむふむガイド」、他者との意見交換や見解を確認しながらひとつの「読み方」に収束させていく。特に、ワークの活用を入れることで、読み取りが苦手な生徒も手がかりを見つけやすい。心情理解を苦手とする生徒も、他者との交流を経て自分の考えに自信がもてるようになる。「書くこと」の授業だが、本文を読み、自分の意見を考え、他者に話し、他者の意見を聞き、自分の意見を再構築させる過程がとても重要になる。意見の相違を踏まえ、ワークシート①で具体的なプロットを完成させることで、リライトがとても書きやすくなると考える。

6		5		4	3	2	1 時間目		
ワークシート②の提出	ワークシート①の記入	確認 「国語のワーク」の範囲	ワークシート①の記入	⑤～⑥場面の読み込み	③～④場面の読み込み	①～②場面の読み込み	課題の提示、本文の通読、登場人物の確認	説明 ワークシート①②の	全体の流れ
課題作文を完成させる	テーマとなる場面の決定	魯迅についての説明	プロットを完成させる	場面描写を理解する	場面描写を理解する	場面描写を理解する	課題を確認する		個の流れ

単元の流れ（全六時間）

自分の意見と他者の意見、見解を総合させて理解を深めていけるように進めた。生徒同士の話し合いでは、教科書のさまざまなページからヒントを見つけ出す姿が見られた。読みが浅い生徒からも「もっと読みたい」「リライトにつながるヒントを見つきたい」という主体性が感じられた。

また、ワークの「解くときのポイント」や「ふむふむガイド」などが効果的な役割を果たした。この單元では、「W・D・E発展資料」の部分も活用し、魯迅の人生や、日本とのつながり、当時の中国の様子、時代背景も学習することができ、ワークがとも役立った。

▼ワークシート①

「故郷」 ワークシート①

○問題 主人の父の墓場の人骨をここに描え。そのうえで作品をライイトアップ。
三年 組 姓(氏名) _____)

墳墓を決めよう。(ペリシ)の行目から②ペリシの行目まで
登場人物を整理しよう。●主人公になる登場人物 ○その他の登場人物
主人公(監督者)として作り、構成を整理しよう。(劇作家書きや文芸家タイプ)

	リラタキをたて墓場を描こう！ 主人公はここへ描きこむよ。		
主 人 公 リ ラ タ キ を た て む ら か を ひ く け い け い			

(評価) ☐ ● 情報を整理し、工夫や思考が十分読み取れる。
☐ B ● 情報を整理し、工夫や思考が読み取れる。
☐ C ● すべての項目を書き、構成のつながりや思考が入っている。
☐ D ● あまり項目を書きこんでない。構成のつながりや思考が見えない。

生徒の振り返りから

「リライトを通して、それぞれの登場人物の『正義』を感じた。最初に読んだときはヤンおぼさんの嫌な感じに腹が立ったけど、よく読んでいくとヤンおぼさんはヤンおぼさんなりの理由があるのではないかと考えた。」「いつもは主人公目線で読むので、『リライト』と聞いて難しそうだと思ったが、取り組んでみると書きたいことが多くあり、400字では足りないくらいだった。もっと書きたいと思った。」という生徒の感想からも、充実した授業だったことがうかがえる。

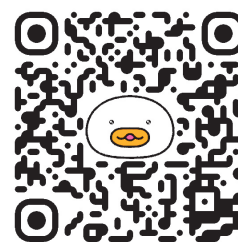
【編集部がつぶやき】 作家の別の面を見る

朝井リョウ氏のエッセイを読んだ。読むと噴き出すことがたびたびで、例えば、自身のデビュー作を「一発ギャグみたいなタイトル」と切るなど、端々の卑屈さや世界に対するシニカルな見方が癖になる。同氏の『正欲』を読んだときは少し苦しい読書体験だったので、温度差に風邪をひきそうになりつつも、こうした観察眼があるからあんな作品を書けるのか、と納得できる部分もあり面白かった。別作品はもちろん、サイン会で直接会ったり、動画のインタビューを見たり、作家を作品とは違うところから見ると、また違う発見が得られるのかもしれない。(編集部：野中／朝井氏のエッセイは著者紹介から笑えます。是非！)

新しい国語のワークキャラクター

ピポ丸

LINEスタンプ 大好評発売中!



話題沸騰中ピポ